令和５年度さいたま市立与野南中学校　学校だより
みなみかぜ
南風
第１２号
令和６年２月１日発行
http://yonominami-j.saitama-city.ed.jp
＜学校教育目標＞ 進んで学ぶ生徒　心豊かな生徒　心身共に健康な生徒

学習活動について ～ 与野南中学校にて

校長　吉原誠士

近い将来、コンピュータに取って代わられそうな職業が挙げられたのはおよそ１０年前のことでした。記事には「教員」も危ないだろうという意見が寄せられ、心穏やかではありませんでした。一昨年(おととし)にはこれに加えて生成ＡＩ(エーアイ)（例えばＣｈａｔ(チャット)ＧＰＴ）の大規模な実用化が報じられ、さらに雲行きが怪しくなりました。この問題は「学びのあり方」にも影響します。「学校だより」は「生成ＡＩ(エーアイ)にキーワードを与えれば簡単に拵(こしら)えてくれる」とのことで、「四苦八苦している校長には朗報でしょう」（私はそうおもいませんが）と皮肉めいたことを言う人もいました。子どもにも大人にも「優れた人工知能が代替してくれるので勉強もしなくて済む」といった誤解が生じそうです。

小学生の時に観ていたテレビドラマ「ワイルド７」の中に「コンピュータは与えられた能力しか発揮できない、人間は自分の能力以上の力を発揮できる」という意味のセリフあり、妙に心に残っていました。今の私は、これを「脳を鍛えること」の大切さを示していると解しています。どんなにハイスペックなコンピュータでも、所詮人間が試行錯誤の末に生み出したものです。いつ、どのような時代であっても、私たち人間は自分の身一つで困難や課題を解決しなければならず、その準備が要るのです。最終的な決定は自分の思考の結果としなければなりません。つまり、「脳細胞を活性化し鍛錬する場」として学校を規定し、改めて日常の学習活動と関連付けることが必要なのではないでしょうか。

学習プロセスは「習得」「活用」「探究」と整理できます。「習得」とは文字通り知識・技能を定着させることです。つまり「記憶し、定着させ、高い精度で再生すること」は今までと変わらず大事にしなければなりません。「活用」は習得したことを使うこと、具体的には「思考を深めて判断し、表現・発信につなげること」です。こちらも従来から行われていましたが、活きた脳を作るにはさらに盛んに仕掛けていきたいと思います。そして、新時代に向けて盛んに求められているのが「探究」で、「自ら課題を設定し、俯瞰的な立ち位置からトライ＆エラーを繰り返して最適解に至ろうとすること」です。高校ではすでに「総合的な探究の時間」が設けられていますし、教科ごとの実践も行われています。

与野南中学校では以上のことを踏まえて授業展開しています。常に頭を使うような仕掛けをしても直ちに効果が見えるものではありませんが、その成果として卒業生が活躍するのを待ち遠しく思います。また、本校の持ち味である「話合い活動」は、新時代の教育にも不可欠なものとして継続しています。学習指導要領では「個の特性に応じること」や「個性を活かすこと」をこれまで以上に求めていますが、“個”が“孤”に陥る危険もあります。そこで、学級や班などの集団による話合いを活かして「『相互評価』により『よさの認め合い』や『助言』が生まれること」を企図しています。ＧＩＧＡスクール構想で支給された「タブレット端末の利用」も時間数において市内随一なのも大きな特徴で、脳を活かす教育にあって、子どもたちが「コンピュータとの付き合い方」も学んでいるようです。保護者・地域の皆様には、本校の教育活動に関する議論に関心を持ち続けていただくよう、よろしくお願いいたします。